『日本アジア研究』第一一号（二〇一四年三月）

異本『新百人一首』釈文　附簡校・解題

武井和人*
坪子和美**

足利義尚撰『新百人一首』は、異種百人一首の嚆矢と考へられてをり、続群書類従（巻第三百七十五）や日本歌学大系（別巻六）に収められて、広く流布してゐる作品である。近時、小論の筆者が入手した江戸初期写の一本（以下架蔵本）は、流布本と比較するに、歌順が全く異なり、また、多くの異同を有することが分つた。そこで、二十本程度の諸本を調査してみた結果、その多くは流布本と同じ内容であつたものの、架蔵本と同じ内容を持つ伝本も少数ながら見出すに至つた。

そこで、架蔵本の如き内容を持つ伝本群をかりに「異本」と見做し、その釈文を架蔵本によつて示すとともに、諸本との校異を掲出して、広く研究者に公開することを企図した。また、架蔵本の書誌事項を中心とした解題を付した。

キーワード　『新百人一首』、足利義尚、三条西実隆

＊　たけい・かずと、埼玉大学教養学部教授、日本古典籍学
＊＊つぼこ・かずみ、埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程修了（二〇一三・三）、日本古典文学

【凡例】

（1）武井は、足利義尚撰『新百人一首』の伝本において《異本》と目される一本を、二〇一二年六月、玉英堂書店入手した。従来異本の存在は知られてをらず、学界に紹介すべき必要性があると判断した。以下釈文を掲出した所以である。

（2）底本は、和歌を二行書で書写するが、これを一行に詰めた。ただし、上句と下句の間に、全角の空白を入れた。また、跋は、本文を詰め、読点を私に付した。

（3）作者名表記は、一律、和歌本文行頭より七字下げとした。

（4）歌番号を漢数字で付した。また、日本歌学大系本（流布本）にも通番号を付し、対応する和歌の末尾に【　】に入れて示した。

（5）面移りは、」1オ・」2ウ、の如く示した。

（6）各々の歌の出典である勅撰集名等を下掲した。なほ、歌番号・作者名表記は新編国歌大観による。

（7）後掲する諸本（主として国文学研究資料館蔵紙焼本による。過半は実見の機を得てゐない）との校異を【簡校】として後掲した。校異掲出箇所は、和歌においては①②～で、跋においては＊で示した。なほ、仮名遣・かな漢字表記の異同、集付の有無等に関する異同の掲出は、原則としてこれを略した。副題に「簡校」としたゆゑんである。

（8）小論を作成するにあたり、以下の分担としたが、併行して相互に点検を行つた。

武井……釈文点検・諸本分類・諸本校合（主として異本・跋文）・解題

坪子……底本釈文礎稿作成・諸本校合（主として流布本）・出典調査・通番号付与・諸本分類基準策定

【対校諸本一覧】

《異本》

1　武井架蔵本　※釈文の底本、江戸初期写　〈底〉

2　宮内庁書陵部図書寮文庫蔵B本〔四五七・一四一〕※慶長十六年李部（智仁親王）書写奥書　〈書B〉

3　肥前島原松平文庫蔵本〔一一九・六〕※江戸初期写　〈島〉

4　京都女子大学附属図書館分館蔵本〔九一一・一四七・Ki七一二〕※江戸初期写　〈京〉

《流布本》

［完本］

1　国文学研究資料館蔵A本〔タ二・六六〕　［資A］

2　国文学研究資料館蔵B本〔ア二・一六・二〕《跋ナシ》　［資B］

3　国文学研究資料館蔵C本〔タ二・二三七〕　［資C］

4 国立公文書館内閣文庫蔵本〔二〇一・三九〇〕《跋ナシ》 ［内］
5 宮内庁書陵部図書寮文庫蔵A本〔二六六・一四二〕《跋ナシ》 ［書A］
6 上田市立図書館花月文庫蔵本〔一二〕※元治二年写 ［花］
7 愛知県立大学図書館蔵本〔九一一・二・一四七六〕 ［愛］
8 岩国徴古館蔵本〔一八・二四〕《跋ナシ》 ［岩］
9 佐賀大学附属図書館鍋島文庫蔵A本〔〇九五五・一七〕 ［鍋A］
10 佐賀大学附属図書館鍋島文庫蔵B本〔〇九五五・一八〕《跋ナシ》※元禄十一年石井行康写 ［鍋B］
11 祐徳稲荷神社中川文庫蔵本〔三四四七〕 ［祐］
12 武庫川女子大学附属図書館蔵A本〔九一一・一〇四・As、袋綴〕《跋ナシ》※享保十四年写 ［武A］
13 武庫川女子大学附属図書館蔵B本〔九一一・一〇四・As、列帖装〕《跋ナシ》 ［武B］
※12・13、武庫川女子大学学術成果コレクションによる
14 斎宮歴史博物館蔵〔江戸前期写〕画帖《跋ナシ》 ［斎］
※『斎宮歴史博物館研究紀要』六（一九九七・三）所掲図版による
15 もりおか歴史文化館蔵A本〔四九六〕《跋ナシ》※享和元年写 ［盛A］
16 もりおか歴史文化館蔵B本〔四八〇の一〕※明治二十四年写 ［盛B］
17 明暦三年刊本（早稲田大学図書館蔵本〔へ〇四・〇二二二七〕） ［早］
※早稲田大学・古典籍総合データベースによる ☆元禄九年再刻版あり（東北大狩野文庫本）
18 天保八年刊本（国文学研究資料館蔵本〔タ二・七二〕《跋ナシ》 ［天］
19 佐佐木信綱『標註七種百人一首』〔博文館、一八九三・一〕所収本《跋ナシ》 ［七］
※底本未詳
20 宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「歌書集成」〔一五五・一〇九〕所収本《跋ナシ》 ［歌］
※日本歌学大系の底本

★以下ノ伝本ハ、錯簡本・残闕本ト位置ヅケラレルノデ、小論デハ対校資料トシナカツタ
［錯簡本］※完本

1　徳島県立図書館森文庫蔵本〔W九一一・一／ショ〕※元禄七年写

［有残闕本］※歌順は流布本と同じ

1　八戸市立図書館蔵旧南部本〔南一五・五一九〕

※【六】より【一五】までの計一〇首を闕く

2　続群書類従本

※【三四】、【八三】より【九二】までの計一一首を闕く

【本文未精査諸本】

《流布本》

［完本］

1　歴史民俗博物館蔵高松宮A本〔H・六〇〇・六六七（旧・ゐ箱四〇四）〕

跋・奥書ナシ。

「江戸前期写〔装訂〕仮綴。〔法量〕二〇・八×一五・〇。〔表紙〕本文共紙（原）。〔外題〕新百人一首（原・左・直・書）。〔内題〕新百人一首。〔本文〕半丁八行。和歌一首二行書。〔丁数〕全一九丁。」（『高松宮家伝来禁裏本目録［分類目録編］』による）

2　歴史民俗博物館蔵高松宮B本〔H・六〇〇・一四七五（旧・ム函一六九）〕

跋・奥書ナシ。『数量和歌』に合写。

「嘉永七年写。〔装訂〕袋綴。〔法量〕一七・三×一二・五。〔表紙〕白茶布目（後補）。〔外題〕なし。〔内題〕なし。〔その他の題〕夜のともし火（見返し貼付題簽）。〔本文〕半丁一四行。詞書四字下げ。朱引。朱筆で集付・合点。〔丁数〕全一九七丁。〔備考〕1丁オウに目録あり。四十九種の作品を合綴。……（旧）名数和歌集。」（『高松宮家伝来禁裏本目録［分類目録編］』による）

3　公益財団法人徳川ミュージアム（彰考館）蔵本〔巳一六・七四一四〕

跋アリ、明暦三年完本ノ転写本、巻末ニ「弘化二年神無月末八日写をはりぬ／藤原安子」トアリ

4　陽明文庫蔵A本〔近・二四四・三六四〕

跋ナシ、巻末ニ「右本常徳院贈太政相国御自撰／以證本写之畢」トアリ

5 陽明文庫蔵B本〔近・ワ・七〕
跋・奥書ナシ、「和哥羣玉抄十六」。

【未調査諸本（抄）】

1 天理図書館蔵竹柏園文庫旧蔵「詠歌集」〔九一〇・二・一四三九・五八七〕所収本
「詠歌之大概」「百人一首」「未来記雨中吟」「武家百人一首」「右三十六人歌合」「古三十六人哥合」「新撰三十六人歌合」「女房三十六人哥合」「新續哥合」「釋門哥仙」「廿一代集巻頭和哥」「俊成卿九十賀屏風十二首和哥」「十二類哥合」「十二月花鳥和哥」「畠山近作亭十二月屏風和哥并詩」「十數和哥」「十界釋教和哥」「十牛之圖和哥」「十體和哥」「九品之和哥」「近江八景詩哥」「南京八景詩哥」「鄰雲観八景和哥并詩」「瀟湘八景詩哥」「逍遥院八景和哥」「七猿和哥」「古六哥仙」「新六哥仙」「六所玉河」「六観音和哥」「六根和哥」「五色和哥」「五性和哥」「庚申五首和哥」「五味哥」「四方和哥」「五妃哥」「三夕和哥」「三體和哥」と合集。寛政四年頃写。

2 宣長記念館蔵本〔文学六の七二〕

3 神宮文庫蔵本〔三・八二一〕

4 立命館大学西園寺文庫蔵本〔九一一・一四七・J八一〕　※寛文元年（一六六一）写

5 鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵本〔地六・二〇九四〕

6 永禄九年写本　※『弘文荘待賈古書目〔新興古書目録〕』一五－一（一九四一・一二）所掲

7 跡見学園女子大学附属図書館蔵本〔九一一・一四七・A九二〕　※良尚法親王筆、一軸

8 跡見学園女子大学附属図書館蔵本〔九一一・一四七・A九九〕　※享禄二年九月十三日奥アリ

9 跡見学園女子大学附属図書館蔵「備前　新百人一首」本〔九一一・一四七・A九二〕

10 同志社女子大学附属図書館蔵本〔九一一・一四七・J九四八二〕　※一軸、享禄二奥、江戸後期写

11 同志社女子大学附属図書館蔵本〔九一一・一三八・W九五八一〕　※一軸、享禄二奥、江戸後期写

12 関西学院大学附属図書館蔵「和歌紫集」〔八五一・一一〇二〕所収本

13 龍谷大学附属大宮図書館写字台文庫蔵「聚拾花芥」中巻〔九一一・二〇八・四八－W〕所収本

14 京都市某家所蔵本　※延宝四年西順写奥アリ、享禄奥アリ、七二首、日本古典資料調査DBによる

15 小浜市立図書館蔵本〔九一一・四三〕　※享禄奥書アリ、日本古典資料調査DBによる

【釈文】

「新百人一首」（外題〔題簽〕）

新百人一首（端作題）

文武天皇

一　立田河紅葉みたれてなかるめり　わたらハにしき中やたえなむ【一】

聖武天皇

二　いもにこひわかの松ハらみわたせは　しほひのかたにたつ鳴わたる【二】」1オ

大職冠

三　たまくしけみむろと山のさねかつら　さねすはつゐにありとみましや【三】

式部卿宇合

四　山しろの石田の小野の柞はら　見つゝや君か山ちこゆらむ【四】

安貴王

五　あきたちていくかもあらしとこのねぬる」1ウ　朝けの風ハたもとすゝしも【二二】

大納言旅人

六　いさやこら香椎のかたにしろたへの　袖さへぬれてわかなつみてむ【一四】

大伴池主

七　神無月しくれにあへるもみちはの　吹はちりなむ風のまに〳〵【一二】

沙弥満誓」2オ

八　よの中をなにゝたとへむ朝ほらけ　こき行舟のあとのしら波【三二】

八代女王

九　みそきするならの小河の河風に　いのりそわたるしたにたえしと【一三】

亭子院

一〇　立かへりちとり鳴なる濱ゆふも　こゝろへたてゝおもふものかハ【七】」2ウ

忠仁公

一一　年ふれハよはひハ老ぬしかハあれと　花をし見れハもの思ひもなし【一〇】

古今・仮名序・ならのみかど

新古今・羈旅・八九七・聖武天皇

続古今・恋三・一一四六・大職冠

新古今・雑中・一五八九・式部卿宇合

拾遺・秋・一四一・安貴王

新勅撰・羈旅・四九四・大納言旅人

新勅撰・冬・三六二・大伴池主

拾遺・哀傷・一三二七・沙弥満誓

新古今・恋五・一三七六・八代女王

新拾遺・雑上・一七〇三・亭子院御製

古今・春上・五二・さきのおほきおほいまうちぎみ

一二　藤原菅根朝臣
あき風にこゑをほにあけてくる舟ハ　天の戸わたる鳫にそありける【六】①

一三　源當純
谷風にとくる氷のひまことに」3オ　うちいつる浪やはるはつ花【五】①（ママ）

一四　山田法師
吉野山もみちの庵いかならむ　よそのあらしの風そはけしき【二七】①②③

一五　清慎公
池水に國さかへけむまきもくの　たまきの風は今ものこれる【九】①②③④⑤

一六　中納言谷雄（ママ）」3ウ
わかためは見るかひもなし忘草　わするはかりのこひにしあらねハ【一一】①②

一七　藤原元真
なみた河身もうく許なかるれと　きえぬは人のおもひなりけり【三八】①

一八　源信明朝臣
ほの〳〵と在明の月の月かけに　紅葉吹おろす山おろしの風【一六】」4オ

一九　増基法師
神無月しくれはかりを身にそへて　しらぬ山ちに入そかなしき【一八】①

二〇　源順
老にける渚の松のふかみとり　しつめる陰をよそにやハ見る【二〇】①②

二一　藤原忠國
われならぬ草葉も物は思ひける」4ウ　袖よりほかにをけるしら露【一七】①②③

二二　蔵内侍（ひイ）
ちかひても猶思ふにはまけにけり　たかためおしきいのちならねは【一九】①

二三　忠義公
身のうさをおもひ知ぬるものならハ　つらき心をなにかうらみむ【八】①②③④

僧都玄賓」5オ

古今・秋上・二一二・藤原菅根朝臣
古今・春上・一二・源まさずみ
続後拾遺・雑上・一〇三九・山田法師
続古今・賀歌・一九〇八・清慎公
後撰・恋四・七八九・はせをの朝臣
新古今・恋一・一〇六〇・藤原元真
新古今・冬・五九一・源信明朝臣
後撰・冬・四五三・増基法師
新古今・雑下・一七〇九・順
後撰・雑四・一二八一・ふぢはらのただくに
後撰・恋四・八八六・蔵内侍
続古今・恋四・一二二九・忠義公

二四　山田守そほつの身こそあハれなれ　あきはてぬれはとふ人もなし【一五】

花山院

二五　あきの夜の月に心のあくかれて　雲ゐにものをおもふころ哉【三九】

太宰大貳高遠

二六　あふさかの関の岩門ふみならし　山たちいつるきりはらの駒【四二】」5ウ

従二位成忠女

二七　ゆめとのみおもひなりにし世中を　なにいまさらにおとろかすらむ【九一】

馬内侍

二八　今夜君いかなる里の月を見て　みやこにたれをおもひいつらむ【三七】

藤原仲文

二九　あり明の月のひかりをまつほとに」6オ　わかよのいたくふけにけるかな【二五】

橘忠幹（直イ）

三〇　わするなよほとハ雲井になりぬとも　そら行月のめくりあふまて【二六】

安法々師

三一　世をそむく山の南の松風に　こけの衣や夜さむなるらむ【二八】

善滋為政朝臣」6ウ

三二　郭公なくさみたれにうへし田を　かり金さむみ秋そくれぬる【三〇】

藤原為頼朝臣

三三　おほつかないつこなるらむ虫のねを　たつねハくさの露やみたれん【二三】

皇太后大夫俊成女（ママ）

三四　ゆめかとよ見し俤も契しも　わすれすなからうつゝならねは【七二】」7オ

後鳥羽院宮内卿

三五　きくやいかにうハのそらなる風たにも　松にをとするならひありとハ【七四】

宜秋門院丹後

三六　袖のうへにたれゆへ月ハやとるそと　よそになしても人のとへかし【六六】

続古今・雑上・一六〇八・僧都玄賓

詞花・秋・一〇六・花山院御製

拾遺・秋・一六九・大弐高遠

拾遺・雑・一二〇六・高階成忠女

拾遺・恋三・七九二・中宮内侍

拾遺・雑上・四三六・藤原仲文

拾遺・雑上・四七〇・たちばなのただもと

新古今・雑中・一六六三・安法法師

新古今・秋下・四五六・善滋為政朝臣

拾遺・秋・一七八・藤原為頼

新古今・恋五・一三九一・皇太后宮大夫俊成女

新古今・恋三・一一九九・宮内卿

新古今・恋二・一一三九・**藤原秀能**

三七　山里は世のうきよりもすみわひぬ」7ウ　ことのほかなる峯のあらしに【八〇】
　　藤原秀能

三八　かきなかす言葉をたにしつむなよ　身こそかくても山河の水【八一】
　　従三位行能

三九　あさち山いろかはりゆくあきかせに　かれなて鹿のつまをこふらむ【七八】
　　正三位知家

四〇　つたへこしわか道芝の冬かれに　まよはむあとの名こそつらけれ【九〇】
　　藤原信実朝臣」8オ

四一　さきの世に誰むすひけん下ひもの　とけぬつらさを身のちきりとハ【九二】
　　安嘉門院四条

四二　神代より道あるくにゝつかへける　ちきりもたえぬ關の藤河【九四】」8ウ
　　光明峯寺入道前摂政太政大臣

四三　いかにせむしなはともにとおもふ身の　おなしかきりのいのちならすハ【八六】
　　藤原光俊朝臣

四四　荻の葉に風のをとせぬ秋もあらハ　なみたのほかに月はみてまし【八七】
　　入道二品親道助（ママ）

四五　あり明のそらにわかれしいもりしま」9オ　かたみのうらに月そのこれる【九八】
　　後嵯峨院

四六　たのめつゝこぬよつもりのうらみても　まつよりほかのなくさめそなき【八三】
　　平忠度朝臣

四七　春雨のあまねき御代をたのむかな　しもにかれ行草葉もらすな【六七】
　　大蔵卿有家

四八　むさしのはゆけとも秋のはてそなき　いかなる風のすゑにふくらむ【六五】
　　後久我前太政大臣」9ウ

　　源季景

新古今・雑中・一六二三・**宜秋門院丹後**

新古今・雑下・一七七七・藤原行能

新勅撰・雑四・一三三九・正三位知家

新千載・雑中・一九六九・信実朝臣

玉葉・恋一・一三二〇・安嘉門院四条

風雅・雑下・一八〇〇・光明峰寺入道前摂政左大臣

続古今・恋三・一二〇七・光俊朝臣

新勅撰・秋上・二二三・入道二品親王道助

続古今・雑中・一六六五・太上天皇

新勅撰・恋三・八五二・平忠度朝臣

続古今・雑上・一四九五・前大納言基良

新古今・秋上・三七八・左衛門督通光

四九　おなしくはあれないにしへ思出の　なけれはとてもしのはすもなし【八二】
鴨長明

五〇　いし河のせみの小河の清けれは　月もなかれをたつねてそすむ【六三】」10オ
左近中将公衡

五一　かりくらしかたのゝましは折しきて　淀の河せの月を見るかな【五五】
高弁上人

五二　松の下岩ねのゆめにすみそめの　袖のあられやかけしらなみ【八八】
法橋行遍

五三　あやしくそかへさは月のくもりにし」10ウ　むかしかたりに夜やふけぬらむ【七七】
三条入道左大臣

五四　いそかれぬとしの暮こそあハれなれ　むかしはよそにきゝし春かハ【四九】
八條院高倉

五五　うき世をはいつる日ことにいとへとも　いつかは月の入かたを見む【六九】
土御門院」11オ

五六　あきの色をゝくりむかへて雲のうへに　なれにし月もゝのわすれすな【九七】
大納言通具

五七　かけ清きよもきか洞の秋の月　霜をてらさはすてすもあらなむ【六八】
登蓮法師

五八　かへりこむほとをや人にちきらまし　しのはれぬへき我身なりせは【五三】」11ウ
寂然法師

五九　あきはきぬとしもなかはにすきぬとや　荻ふく風のおとろかすらむ【五八】
後徳大寺左大臣母

六〇　椎柴のつゆけき袖はたなはたも　かさぬにつけてあはれとや見む【六一】
小侍従

六一　しきみつむ山ちの露にぬれにけり」12オ　あかつきおきのすみそめの袖【七三】

新古今・雑下・一七七九・源季景
新古今・神祇・一八九四・鴨長明
新古今・冬・六八八・左近中将公衡
新勅撰・釈教・六二七・高弁上人
新古今・雑上・一五五〇・法橋行遍
新古今・冬・七〇一・入道左大臣
新古今・雑下・一八四一・八条院高倉
続後撰・雑下・一二〇三・土御門院御製
新後拾・雑下・一三七八・大納言通具
新古今・離別・八八二・登蓮法師
千載・秋上・二三〇・寂然法師
千載・哀傷・五八七・三位右大臣母
新古今・雑中・一六六六・小侍従

太宰大貳重家

六二　後の世をなけく涙といひなして　しほりやせましすみそめの袖【五七】

刑部卿範兼

六三　月まつと人にはいひてなかむれハ　なくさめかたきゆふくれのそら【五九】

大炊御門右大臣」12ウ

六四　わか戀はちきのかたそきかたくのミ　ゆきあはてとしのつもりぬる哉【五六】

大江維順女

六五　わすらるゝうき名ハさても立にけり　こゝろのうちは思ひわけとも【六〇】

勝命法師

六六　あさことに汀の氷ふみわけて　君につかふ道そかしこき【四一】」13オ

土御門内大臣

六七　我ならぬ人もあはれやまさるらむ　鹿鳴山のあきのゆふくれ【×＝**流布本ナシ**】

前大納言忠良

六八　山ふかき草のいほりの雨の夜に　をとせてふるはなみたなりけり【六二】

右大将頼朝

六九　みちのくのいはてしのふハえそしらぬ」13ウ　かきつくしてよつほのいしふみ【七〇】

中納言國信

七〇　かすかのゝ下もえわたる草のうへに　つれなく見ゆる春のあハゆき【六四】

中宮大夫師忠

七一　山さとの稲葉の風にねさめして　よふかく鹿のこゑを聞かな【七五】

藤原範永朝臣」14オ

七二　在明の月もし水にやとりけり　こよひはこゑし相阪の關【三四】

橘為仲朝臣

七三　あやなくもくもらぬ宵をいとふ哉　しのふの里の秋の夜の月【四四】

源頼實

新古今・恋二・一一〇二・大宰大弐重家

千載・恋四・八七三・刑部卿範兼

新古今・恋二・一一一四・大炊御門右大臣

千載・恋二・七七一・大江維順女

新古今・雑上・一五七八・**土御門内大臣**

新古今・秋下・四四三・土御門内大臣

風雅・雑中・一七六九・前大納言忠良

新古今・雑下・一七八六・前右大将頼朝

新古今・春上・一〇・権中納言国信

新古今・秋下・四四九・中宮大夫師忠

千載・羈旅・四九八・藤原範永朝臣

新古今・秋上・三八五・橘為仲朝臣

七四　この葉ちる宿はきゝわく方そなき　しくれする夜もしくれせぬよも【四三】」14ウ
修理大夫顕季

七五　しくれつゝかつちる山の紅葉ハを　いかにふく夜のあらしなるらむ【四五】
法性寺入道前關白家堀河

七六　契置し人もかれのゝ木の間より　たのめぬ月のかけそもりくる【五〇】
神祇伯顕仲

七七　かもめゐる藤江の浦の沖つ洲に」15オ　夜舟いさよふ月のさやけさ【四七】
藤原資宗朝臣

七八　筏士よまてことゝハむ水かみハ　いかはりふく山のあらしそ【七六】
従三位頼政

七九　さゝ浪やまのゝ濱へに駒とめて　比良のたかねの花をみる哉【五四】
瞻西上人」15ウ

八〇　庵さす楢の木陰に守月の　くもるを見れハしくれふる也【五一】
僧都清胤

八一　君すまはとはましものをつの國の　いく田の森のあき初かせ【五二】
三條女蔵人左近

八二　大井河杣山かせのさむけきに　いはうつ浪を雪かとそ見る【三一】」16オ
平祐挙

八三　むねは冨士袖は清見か關なれや　けふりも浪もたゝぬ日そなき【二一】
藤原長能

八四　あられふるかたのゝミのゝ狩衣　ぬれぬやとかす人しなけれハ【三三】
具平親王

八五　世にふるもの思ふとしもなけれとも」16ウ　月にいくたひなかめしつらむ【二四】
女御

八六　みな人のそむきはてぬる世中に　ふるのやしろの身をいかにせむ【七九】

後拾遺・冬・三八二・源頼実
金葉・冬・二五八・修理大夫顕季
金葉二・恋下・四七〇・摂政家堀河
新古今・雑上・一五五四・神祇伯顕仲
新古今・冬・五五四・藤原資宗朝臣
新続古・春下・一三〇・従三位頼政
詞花・冬・一五〇・瞻西上人
詞花・秋・八三・僧都清胤
新拾遺・冬・六六九・三条院女蔵人左近
詞花・恋上・二一三・平祐挙
詞花・冬・一五二・藤原長能
拾遺集・雑上・四三二・中務卿具平親王
新古今・雑下・一七九六・女御徽子女王

八七　藤原惟成[1]
しはしまてまた夜ハふかし長月の　あり明の月は人まとふ[2]也【二九】
源道済」17オ

八八　思ひかねわかれし野へをきてミれは　あさちかはらに秋[1]かせそふく【四〇】
堀河右大臣

八九　櫻花あかぬあまりに思ふかな　ちらすは人やおしまさらまし【三五】
白河院[1]

九〇　庭の面は月もらぬまて成にけり　こ[2]するゑになつ[3]の陰しけりつゝ【四六】」17ウ
大納言公實

九一　おもひあまりいかてもらさむ奥山の　岩垣こ[1]むる谷のした水【三六】
前大納言為家

九二　高砂[1]の山のやま[2]守おのへなる　はつ[2]おのたれ尾かくこふらむ【八四】
藤原隆祐朝臣

九三　夕日さす遠山本のさと見えて[3]」18オ　すゝき吹しく野への秋風【八五】
中務卿宗尊親王

九四　いつよりか[1]秋のもみちのくれなゐに　なミたの色[2]のならひ初[3]けむ【九六】
常磐井入道前太政大臣[1]

九五　うらかれのあしの末葉に風すきて[2]　入江をわたる秋のむらさめ【九五】
後九条内大臣[1]（ママ）」18ウ

九六　あなしふく弓槻[2]か嶽[3]に雲[4]きえて[5]　檜[6]原のうへに風[7]わたる見ゆ【四八】
天台座主澄覚

九七　おきの葉にありけるものを花ゆへ[1]に　春もうかりし風のやとり[2]ハ【九三】
藤原雅顕[1]

九八　里のあまのかり初なりし契より　やかてみるめのたよりをそとふ[2]【八九】」19オ
伏見院

新古今・恋三・一一八二・藤原惟成
詞花・雑上・三三七・源道済
後拾遺・春下・一三一・堀川右大臣
新古今・夏・二四九・白河院御歌
金葉二・恋上・三八二・春宮大夫公実
続古今・恋歌四・一二二〇・前大納言為家
風雅・秋上・四八九・藤原隆祐朝臣
続千載・恋二・一一五九・中務卿宗尊親王
続拾遺・秋下・三四二・常磐井入道前太政大臣
続古今・秋上・三八九・前内大臣基
続古今・秋上・三〇五・天台座主澄覚
新後撰・恋三・一〇四八・藤原雅顕

九九　わすれすよ御階の花の木の間より　かすみてふけし雲のうへの月【九九】

花園院

玉葉・雑一・一八八七・院御製

一〇〇　あしはらやみたれし國の風をかへて　民のくさ葉も今なひくらむ①【一〇〇】

風雅・賀歌・二一九七・院御歌

（二行分空白）」19ウ

（半葉空白）」20オ

百人一首和歌とて、大津の宮のそのかみ、かりほのつゆのふることより始て、承久のもゝしき軒のしのふのことはにいたるまて、とをく世中につたはれるは、京極中納言、みつからの山里の障子にかきをかれけるを、今の代までのもてあそひとせるならし、しかあるを、このころ、柳のいとより〳〵に、そのほかの哥仙のうたとも」20ウを、さらにいろことなる紙ともにかき出しまし〳〵たるを、見てまつるへきよしおほせこと侍し、御筆のいきほひ、すみ付、この世のもとも見えす、めなれぬさまなと、こゝろことはもをよひかたく、これそ千とせのたからに侍るへきと、をろかなる心のうちにもありかたくおもひたてまつりて、さるは、えらひいたされるおもむきも、たくひなくめてたき御事」21オに侍れハ、ひろくすゑの世にもつたへまほしくて、御中かきを申出してまかてたりし、これも又、石の文はこ、壁の中にもおさめをき侍へけれハ、たやすくひらきみるへきにしあらされハ、さらにかたのやうにうつしをきて、これをあけくれのまくらことにすへしとなり」21ウ

をくら山時雨ふりにしいにしへの　あとにもこゆることの葉そこれ

（四行分空白）

本云

文明十五年神無月下四日灯本

にてを初をはりぬ」22オ

長享二拾帙　夾鐘上旬

書写之早

天正五年菊月中旬頓令

書写之

沙門栄弘八生十年三

（一行分空白）」22ウ

【簡校】

《和歌》

二　①しほのひかたに［愛・岩・鍋B・武A・武B・斎・早］

三　①「識」を墨筆にてミセケチとし右傍に「職」［内］　②さねつ［岩］

五　①あらね［資A・資B］、あらねと〈書B・島・京〉［資C・内・書A・花・愛・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・七・歌］、あらぬニ［岩］

六　①いさやこゝ〈書B〉、いさやこゝ〈島〉、いさやこゝ（「ゝ」の右傍に朱筆にて「ら歟」・「い」を朱筆にてミセケチにし、右傍に朱筆にて「ゐ」）［資B］　②「しらつゆ」墨筆にてミセケチとし右傍に「白妙」［内］　③あさな〈書B・島〉［資A・資B・内・書A・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・歌］、あさる（ミセケチにて「あさな」）［資C］

七　①あへぬ［花・盛A・盛B・七］　②ふかく［資B］　③ちる［花］　④そのま〳〵に［武A］

九　①「秋」墨筆にてミセケチとし右傍に「河」［内］　②「り」右傍下に墨筆にて「そ」［内］　③「へ」墨筆にてミセケチとし右傍に「え」［内］　④「を」墨筆にてミセケチとし右傍に「と」［内］

一〇　①なくなり［岩・鍋B・祐・武A・斎・早・七］、也をミセケチ。訂正後の本文なし［盛B］　②はまゆふの［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・七・歌］　③頃かな［岩］

一一　①ふれと〈島〉　②おもへなし［花］

一二　①谷風［盛B］

一三　①春のはつ花〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌］

一四　①色や［資B・書A・花・盛A・盛B・天・七］「いほり」墨筆にてミセケチとし右傍に「色や」［内］　②「れ」を墨筆にてミセケチとし右傍に「ら」［資C］　③音［資A・資B・資C・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七］

一五　①「慎」を「惜」とし墨筆にてミセケチとし作者名表記右下に「清慎公」［内］　②けん〈島〉、ける［資A・資B・資C・内・書A・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・七・歌］、たる［花・盛B］　③「真木もく」を墨筆にてミセケチとし右傍に「巻向」［内］　④に〈書B〉、の〈京〉　⑤のこれり〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・七・歌］、「る」を墨筆にてミセケチとし右傍に「り」［内］

一六　①中納言長谷雄〈京〉［資A・資B・資C・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・斎・盛A・盛B・早・七・歌］、中納言長雄［武B］、中納言長谷雄（「中納言」墨筆にてミセケチとし作者名表記右下に「朝臣」）［内］　②し〈島〉

一七　①なかるれは［書A］、「ハ」墨筆にてミセケチとし右傍に「と歟」［内］

一九　①いそく［斎］

二〇　①「り」墨筆にてミセケチとし右傍に「る」［内］　②賤める［岩］

二一　①我ならて［岩］　②物を〈島〉［愛・岩・武A・武B］　③おもひけり［資A・資B・資C・内・書A・花・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・歌］

二二　①なるらむ［花・盛B・七］、「らねは」をミセケチにし右傍に「るらむ」［盛A］

二三　①「儀」を墨筆にてミセケチとし作者名表記右下に「義」［内］　②うき［鍋A］　③「ゐ」を墨筆にてミセケチとし右傍に「ぬ」［内］　④なれハ［岩］

二四　①言賓［七］　②かなしけれ［資A・書A・花・愛・岩・鍋B・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・七］、「悲しけれ」の右傍に墨筆にて「あはれなれ」とあり［資C］

二五　①ハ〈島〉　②「を」を墨筆にてミセケチとし右傍に「の」［資C］　③あくかれん〈書B〉あこかれて［盛A］

二七　①王［花・天］、「女」の右傍に「イ王」［盛A］　②なれにし［鍋A・祐］

二九　①更に（「けるかな」ナシ）［盛B］

三二　①なくや［書A・花・盛A・盛B・天・七］、「や」を朱筆にてミセケチ［資B］、「や」墨筆にてミセケチとする［内］
②さ月に［書A・花・盛A・盛B・天・七］、「月」の右傍下よりに朱筆にて「雨」［資B］、「雨」墨筆にて補入［内］
③うへし田の［鍋A］

三三　①「いつく」「イこ」［盛A］　②たつねて［斎］

三四　①皇太后宮大夫俊成女〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌］

三五　①後鳥院［資A］　②ならへ［花］

三六　①正シイ作者ハ「藤原秀能」。流布本ハ正シク「藤原秀能」ニ作ル。タダシ、［資C］ノミ「藤原季能」ニ作ル。　②なに［花・盛B・七］、「誰」をミセケチとし、右傍に「何」［盛A］

三七　①正シイ作者ハ「宜秋門院丹後」。流布本ハ正シク「宜秋門院丹後」ニ作ル。　②よりハ［書A・鍋A］、「よりも」墨筆にて

「も」右傍に「ハ」[内]　③あらしハ [岩]

三九　①あさち原 [花・天・七]、荒地山（イ浅茅原）[盛A]

四〇　①つかへこし [花・天・七]、「たゑ」をミセケチとし、右傍に「かへ」[盛A]　②冬かれて [書A]　③をしけれ（イつら）[盛A]

四一　①女 [岩]

四二　①左大臣〈書B・島・京〉[資B・内・書A・愛・岩・鍋B・武A・盛A・花・天・七]、摂政左大臣 [盛B]、前太政大臣 [祐]、②つたへ [書A]　③ちきりハたえぬ [岩]、ちきりたえせぬ [盛B]

四三　①同しかきりの命ならすねは [内]、おなしかきりの命ならねは [書A・岩・鍋A・鍋B・斎]、命ならすはおなしかきりの [武B]、おなしかきりのいのちともかな [盛A]

四四　①入道二品親王道助〈書B・島・京〉[資A・資B・資C・内・書A・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・歌]、入道道助親王 [花・盛B・天・七]　②音する [岩]

四六　①ナシ [資B]　②うらみても〈島〉

四七　①春の雨の〈書B・島・京〉、春まち雨の [資A]、春の雨の [資B・資C・内・書A・花・愛・武A・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌] 春の雨に [岩・鍋B]、春の雨 [武B]

四八　①むさしのや [内・書A・愛・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・早・歌]、「や」をミセケチとし、右傍に「は」[盛A]　②行柳も [花・天]、「けとひ（？）」をミセケチとし、右傍に「きても」[盛A]　③「そ」「き」をミセケチとし、右傍に「ぬ」「り」[盛A]

四九　①かなしさは [岩]　②あはれいにしへ [花・天・七]、あれなはにしへ [鍋A]　③なけけは [花]

五〇　①や〈書B〉　②澄 [花]

五二　①ゑはね「花」　②苔〈書B・京〉[資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・天・七・歌]　③「て」を墨筆にてミセケチとし右傍に「の」[資C]　④あはれ [武B・歌]　⑤しら玉〈書B・京〉[資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌]

※［武A］作者名、鼇頭ニ朱書ニテ「栂尾ノ明恵」ト注記アリ

五三　①も（イそ）［盛A］　②くもりにき [岩]

五四　★［盛A］コノ歌ナシ　①いそかれの [岩]　②なり [岩]

五五　①うき世をは日ことに [花]

五六　①雲のうゐに［花］　②詠［盛A］
五七　①きよし〈島〉　②はら［岩・盛A］、「ほ」の右傍に墨筆にて「は」、朱筆にて「は」を朱引しその下に「イ」［資B］、もと［斎］ほら［資B］
五八　①堯蓮［盛A］
五九　①秋も［鍋A・天・七］、「は」をミセケチとし、右傍に「も」［盛A］
六〇　①母（イ女）［盛A］、女［盛B・天・七］　②七夕の［岩・鍋A・斎］、「の」を朱筆にてミセケチにし、右傍に朱筆にて「も」［資B］
③ころも〈書B〉
六三　①形部卿［内］　②なかむれと［花・岩・武A・天・七］、なかむれハ（イと）［盛A］
六四　①かたくのの［盛A］　②「ひ」を朱筆にてミセケチにし、右傍に朱筆にて「は」［資B］
六五　①わふとも［資A］、わけても［愛・鍋B・武B・早］、わけて（イと）も［盛A］、忘れて［武A］
六六　①土御門院［資C］　②「君につかふる」をミセケチとし、右傍に「みきはの氷」［盛B］
六七　★流布本、コノ歌ナシ
六八　①ふかミ［斎］、「み」を墨筆にてミセケチとし右傍に「き」［資C］　②よるの雨に［花・盛B・天・七］、「夜の雨の」墨筆にてミセケチとし左傍に「雨の夜に」［内］、「雨の夜」の右傍に「イ夜の雨」［盛A］、あめの夜も［鍋A・祐］　③恋路［盛B］
六九　①前右大将［資A・愛・岩・鍋B・武A・武B・斎・盛A・早］　②道の奥の［内］　③忍ふも〈書B〉、忍ふそ［鍋A・祐］
④つくしてそ〈島〉、つくしても［花］
七〇　①春の日の［内］　②「雨」墨筆にて右傍に「面歟」［内］　③見える［花］
七一　①かけ［七］　②きくらん［岩］
七二　①範長［資B・書A］　②こざし［七］
七四　①こと［資B・書A］
七五　①紅葉丶ハ［資B・愛・岩・武A・武B・早］、「ハ」墨筆にてミセケチとし右傍に「を」［内］
七六　★［盛A］コノ歌ナシ　①関白［岩］　②こすゑの［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛B・早・天・七・歌］
七七　①入江の［書A］　②奥［武A・歌］

七八　①「宗」をミセケチとし、右傍に「家」［盛A］、資家［七］　②いかはかり〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・天・七・歌］　③峯の［花・愛・鍋A・祐・天］、「山の」右傍に墨筆にて「ミねのイ」、朱筆にて「ミねのイ」を朱引［資B］、「や」の右傍に「イ峯」［盛A］、みね（イ山）［歌］　④あらしに［武B］

七九　①近江路［資B・内・書A］、淡海［花］、さゝ波（イ淡海の）［盛A］、淡海の［盛B・天］、淡海のや［七］

八〇　①木陰ハ［花・愛・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・盛A・盛B・早・天・七・歌］、木陰を［岩］、「ハ」に「に」と重書きし、さらに抹消して、右傍に「ハ」と墨書［祐］　②くもると［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋B・武A・武B・盛A・盛B・早・七］

八一　①あきのはつかせ〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌］

八二　①三条院〈書B・島・京〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌］　②寒けれは〈書B〉［資B・書A・鍋A・盛A・盛B・天・七］、「ハれは」の右傍に墨筆にて「けれは」［内］、さむけさに［岩・武A］　③たつ岩波を［資B・花・鍋A・盛B・天・七］、「波」の右傍に墨筆にて「うつ」［内］

八三　①「君」墨筆にてミセケチとし右傍に「き」［内］、②「え」墨筆にてミセケチとし右傍に「た」［内］、たらぬ［花］

八四　①「く」墨筆にてミセケチとし右傍に「ら」［内］　②やとりす〈京〉

八五　①「身」墨筆にてミセケチとし右傍に「世」［内］　②ふるハ［花・天・七］、「に」をミセケチとし、右傍に「ハ」［盛A］　③としは［資B・書A］、「年ハ」墨筆にてミセケチとし右傍に「としも」［内］

八六　①女御徽子女王〈書B・島〉、恵子内親王［歌］　②みな人は［資A・愛・岩・鍋B・武A・武B・早］　③たる（ぬイ）［愛］

八七　①惟盛［資B・書A・花・鍋A・祐・七］、雅成［盛A］　②まよふ［資B・書A］、「よ」墨筆にてミセケチとし右傍に「と」［内］

八八　①風そよくなり［盛A］

九〇　①「葉」墨筆にてミセケチとし右傍に「する」［内］　②露［武B・早］

九一　★［盛A］コノ歌ナシ　①こもる［資A・鍋B・祐・歌］

九二　①足引の［花・天・七］、高砂（イ足引）［盛A］、足引の（右傍に「高砂の類句」と注記あり）［盛B］　②山鳥［資A・資B・資C・

内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・早・天・七・歌］　②はつ松〈書B〉

九三　①隆資［七］　②影〈島〉　③見ゐて［花］

九四　①「ハ」墨筆にて右傍に「かイ」［内］　②色を［資B］　③染けむ［武A］

九五　①左大臣［盛A］　②うらかるゝ〈書B・島〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・盛B・早・天・七・歌］

九六　①後九条前内大臣［資A・資B・資C・内・書A・愛・　岩・鍋A・鍋B・祐・武B・斎・盛A・早・歌］　②嵐ふく［資A・資B・書A・花・愛・岩・武A・武B・盛A・盛B・早・天・七］、「嵐」の右傍に墨筆にて「あなし」とあり［資C］　③ゆつきの［鍋A］　④「の」の右傍に墨筆にて「に」とあり［資C］　⑤雪［七］　⑥「はれ」の右傍に墨筆にて「きえ」とあり［資C］　⑦月〈書B・島〉［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛A・天・七・歌］

九七　①ゆへは〈京〉　②やとりに［斎］

九八　①種顕［盛A］　②思ふ［資A・資B・花・岩・天・七］、「と」をミセケチとし、右傍に「思」［盛A］

一〇〇　①なり［資A・資B・資C・内・書A・花・愛・岩・鍋A・鍋B・祐・武A・武B・斎・盛B・早・天・七・歌］、「らむ」の右傍に「イなり」［盛A］

《跋》

＊和歌ーナシ［花・盛B］

＊大津ー大伴［鍋A・祐］

＊のーナシ［愛・鍋A・祐・早］

＊よりーめて［資C・祐］、まて［愛・早］、にめて［鍋A］

＊始てーナシ［資A・花・愛・鍋A・早］

＊ももしきー百敷の［花・愛・鍋A・祐・盛B・早］

＊とをくーナシ［資A・資C・愛・鍋A・祐・盛B・早］

＊世中ー中［資C・鍋A・祐］

＊かきーナシ［資C・鍋A・早］

＊をかれけるをーおされたるを［資A・愛・鍋A・祐・早］、おかれたるを［資C］

＊いと－糸の［資A・花・愛・早］
＊を－ナシ［資C・愛・鍋A・祐・早］
＊さらに－さゑに［盛B］
＊おほせこと－おほせとと〈京〉
＊もとも－物とも〈書B・島・京〉［花・祐］、物と［資A・資C・愛・鍋A・早］
＊さま－書やう〈書B・島〉、書さま〈京〉［資C］
＊たてまつりて－たてまつる〈島〉
＊さるは－さる後［愛・早］
＊いたされる－出されたる〈書B・島・京〉［資A・資C・花・愛・鍋A・祐・盛B］
＊おもむきも－けに［資A・愛・早］、きも［資C・鍋A・祐］
＊ひろく－かろく［資A・愛・早］
＊するゑの世にも－ナシ［資A・愛・鍋A・祐・早］
＊つたへまほしくて－つたへまほしとて［資A・愛・早］
＊申出して－出して〈書B〉
＊まかてたりし－まかてたり［花］
＊これも－ナシ［資A・愛・鍋A・祐・早］
＊侍へけれハ－侍へきハ［資A・花・愛・早］
＊あらされハ－あらされに（「に」右傍に不審紙）〈書B〉
＊さらに－ナシ〈書B〉［資A］
＊あけくれの－あけくれ［資A・花・愛・鍋A・祐・盛B・早］
＊まくらこと－まくらもと［盛B］
＊となり－ナシ〈島〉とや［資A・愛・早］
＊いにしへ－いにしゑ［花］

【解題】

足利義尚撰『新百人一首』は、続群書類従（巻第三百七十五）や日本歌学大系（別巻六、丸谷才一『新々百人一首』に再録）に収められてをり、異種百人一首の嚆矢として広く知られて来た。ところが、近時入手した架蔵本は、脚注に示した通り、通行本（以下流布本）と歌順が大幅に異なり、異本としか位置づけられないものであつた。そこで、国文学研究資料館に所蔵される紙焼・ＭＦを中心にして、諸本を試行的に調べてみたところ、多くは流布本と歌順が一致したのだが、数は少ないながらも、架蔵本と歌順を同じうするものを見出した。そのことを踏まへ愚考するに、架蔵本は、ひとり何らかの錯誤によつて生成したものではなく、流布本⟷異本といふ系統論的対立がその背後にあり、かつ両者の関係は、編纂といふ視点から説かれるべきものであるとの考へに至つた。小論では、従来全く紹介されたことのない異本の本文を示し、併せて、諸本との異同を示すことで、広く研究資料たらしめようと企図した。なほ、流布本と異本の関係、成立過程に関しては、一つの仮説を別稿（『新百人一首』成立攷・続貂」（『國學院雑誌』第一一四巻一一号、二〇一三・一一）にて提示したので、併せ参看して頂ければ幸甚である。

架蔵本の書誌は以下の通り。

近代帙入。縦一六・二cm、横一五・九cm。枡形本。一帖。表紙は厚手の鳥の子紙、黄土色地布目押し模様に金泥で菊花文様。表紙左に題簽（金銀泥引き、一一cm×二・八cm、鳥の子紙）が貼られ、本文と同筆で「新百人一首」と墨書される。恐らく原装であらう。前表紙・後表紙見返しは密に金砂を散らす。本文料紙は、布目押し模様の鳥の子紙。白紙と微かに藍を漉き込んだ紙を交互に重ねてある。紙数は以下の通り。

第一折……首部遊紙一丁、墨付一二丁　　第二折……墨付一〇丁、尾部遊紙三丁

和歌一首二行書、一面九行（和歌）、一一行（跋）。江戸初期写（玉英堂書店の書き付けには「寛文延宝頃写」とある。妥当な推定である）。定家様の筆蹟。

本文末尾に、以下の本奥書が存する。

本云

文明十五年神無月下四日灯本
にてを（ママ）初をはりぬ」22オ
長享二（ママ）拾帙　夾鐘上旬
書写之早

天正五年菊月中旬頓令
書写之
沙門栄弘八生年十三

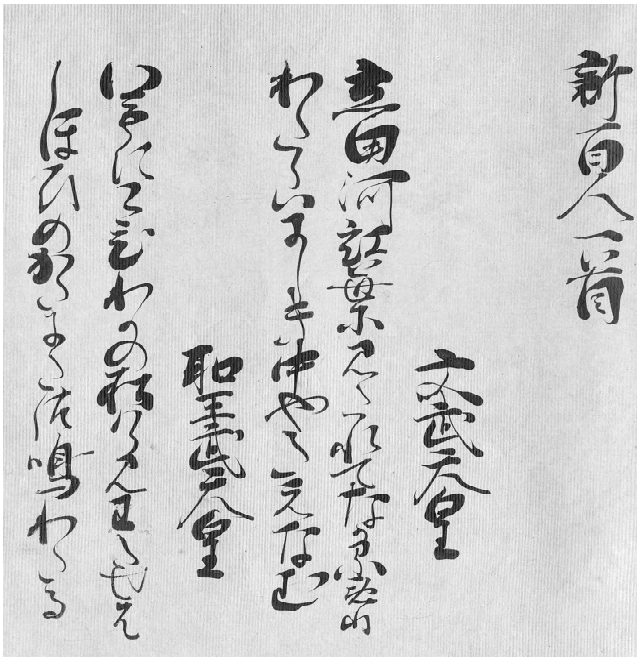
（一行分空白）」22ウ

これと同じ本奥書を有するのが、

肥前島原松平文庫蔵本〔一一九・六〕※江戸初期写

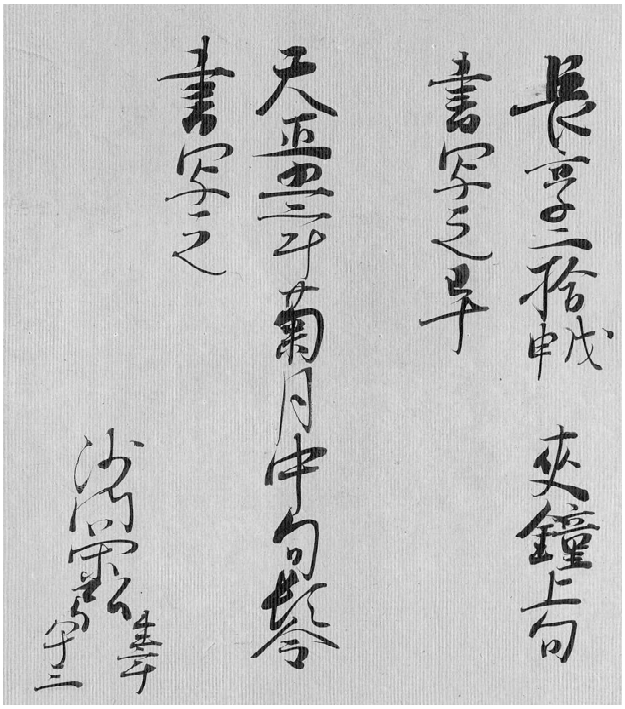
京都女子大学附属図書館分館蔵本〔九一一・一四七・Ｋｉ七一二〕※江戸初期写

この二本である。特に、京都女子大学本は、架蔵本と同じく定家様の筆蹟で書写されてをり、直接的な親子関係を想定したくなるが、簡校からも察せられるやうに、親子関係ではなくむしろ兄弟関係と見做した方が自然であらう。なほ、長享二年書写の本奥書のみを持つ異本として、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵Ｂ本〔四五七・一四一〕（慶長十六年李部（智仁親王）書写奥書）がある。



【架蔵本・巻頭】

【架蔵本・巻尾】



The New One Hundred Poets, One Poem Each: A Variant Text with Typographic Transliteration, Collation, and Bibliographical Remarks

Kazuto TAKEI & Kazumi TSUBOKO

The New One Hundred Poets, One Poem Each, compiled by the shogun Ashikaga Yoshihisa (d. 1489), is believed to be the earliest of several imitations of the original *Ogura Hyakunin Isshu* attributed to Fujiwara Teika (d. 1421). Typographical editions appear in *Shoku gunshoruijû* (fascicle 375) and *Nihon kagaku taikei* (Supplementary Volume 6) and prior to these the text circulated widely in manuscript and xylograph. An early Edo period manuscript (hereunder "Takei MS.") recently acquired by a co-author of this article exhibits considerable departures from the received text (*rufubon*); the ordering of the poems is different and textual variants are numerous. Upon comparison with 20 some other manuscripts and editions, it became clear that while the majority of these generally concur with the received text, three manuscripts were found to agree substantially with Takei MS.

In view of the above, we have designated Takei MS. and its cohort as a Variant Text, and herewith present a transcription of the Takei MS., collated against three other versions of the Variant Text and 20 versions of the received text, with a view to making this material available to scholars. Bibliographical remarks, primarily a description of Takei MS., have been appended.

Key words: *The New One Hundred Poets, One Poem Each*, Ashikaga Yoshihisa, Sanjonishi Sanetaka